
家出孤児

p p

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家出孤児

【Zマーク】

Z3935A

【作者名】

pp

【あらすじ】

親に嫌気がさして家出した純と天音。ちょうどその日に友達の刃矢人も家出をしていた。増えていく仲間や減っていく仲間。苦しみを乗り越えて生き延びようとする子供達、そして恋。わけありの子供達の生活です。

プロローグ・仲良しの兄妹（前書き）

話の初めでは謎に包まれたところが多い作品です。でも、話が進むにつれてその謎は解けていきます。すごいどん返しもありますので、お楽しみに〜。ちなみに、純と天音の苗字は『木下』です！

プロローグ・仲良しの兄妹

夜中の人通りの少ない道路。そこを一人の少年が走っていた。名前は純、小学6年生だ。

身なりはきれいにしているが、洋服と上着が所々切れている。

彼は少し急いでいた。というより、あわてていた。

純はやぶの前で足を止め、横に並んだ木の数を数え始めた。

そして、右から5本目と6本目の間（木は10本ある）に入つて行つた。

それは外から見るとただのやぶだが、中に入つてみると広い森だつた。

そこを右、左、右、右……という風に複雑な方向に進んで行く。しかし、純は全く迷つた様子を見せない。

しばらく進むと、少女が現れた。彼女の名前は天音、小学3年生で、純の妹だ。

「お兄ちゃん、お帰り！」

天音の様子からすると、天音はお兄ちゃん子で、純も天音に優しくしているようだった。

2人は一緒に森の中を進んで行つた。天音も全く迷っていない。
(森から出て来たし……)

数分間歩き続けると、ひらけた場所に出た。まるで一軒家のリビングのようだ。

そこの真ん中には大きな木の切り株があり、その周りには取り囲むようにして小さな切り株が7つある。

まるでテーブルとイスのようだ。というより、そう確定している。

純はイスに座ると、上着のポケットからチョココレートを取り出した。

「ほら天音、お土産のチョコ。」

その言葉を天音は聞き逃さなかつた。

「わあっ！お兄ちゃん、ありがとう！」

そう言ってチョコレートを純から受け取ると、特別に長く伸びた草のところへ行き、その中にチョコレートを入れた。

草の中にはその他にも、数本の缶ジュースとスルメが入つていて、「おい天音、そのジュースはいつになつたら飲むんだ？早く飲まないと腐るぞ。」

と純が言った。しかし、天音はお構いなしに、

「消費期限ギリギリに飲むからいいわ！」

と言つて、笑いながらジュースの消費期限を見ていた。

そんな天音を見て、純は微笑んだ。

「いつまでこんな笑顔が見れるのだろう・・・。」

そう純が呟いたが、天音は気づかずにはまだ消費期限を見ていた。

「天音、歯を磨いて来い！そうしたら寝るぞ！」

純がそう言つと、天音は森のさらに奥へ向かつて行つた。
この2人はここに住んでいた。かなり昔から・・・。

プロローグ・仲良しの兄妹（後書き）

実は、この作品は一度ノートで書かれていました。
クラスの友達には大変人気でして・・・。
それをリユースして投稿してみました。
よろしければ感想ください！待っています！

第一話・自分の家なんか・・・！

純と天音は裕福な家に生まれた。よそから見れば羨ましく感じるだろうが、この2人は違った。

父親は失敗をお金の力で解決してばかりで、とても尊敬できる人柄ではない。

母親は1日中通販ばかりしていて、家事や子供の相手は召使いに任せていた。

こんな親の姿を見ていられなくなつた2人は、夏の朝早くに家を出た。

「天音、自転車持つて行く？」

「うん。」

これが2人が家の前でかわした最後の会話だった。そう、ここに2度と戻るまいと誓つたのだ。

行く場所はすでに決まつていた。純と天音、そして2歳年上の友達の刃矢人しか知らない秘密基地へ行くのだ。ここは人通りの少ない路地にある森（外からはやぶに見える）にあるから、人は入つて来ないのだ。

それに、中は木がたくさんあり、それが寄り集まつて迷路のようになつてている。

ここまで家出に適した所があるつかと、2人は迷わずにそこへ向かつた。

森の入り口。右から5番目と6番目の木の間から中へ入り、何回も曲がる。

すると、リビングのような広い所へ出る。（普通の家のリビングの5倍はあるが・・・）

森の中はとても広いのだが、2人は1度も迷わずに進み続けた。

「・・・純か？」

基地から声が聞こえた。

「刃矢兄！？」

純がそう言うと、刃矢人は基地から出てきた。そして、純の格好を見ると、

「純、お前もか。」

と言った。すると純が、

「う、うん・・・。天音も一緒。」

と呟いた。少し沈黙が流れたが、天音は状況が分からずに純に話しかけた。

「これから刃矢人兄ちゃんも一緒なの？ねえ、そうなの？」

純は返事をしなかつたが、代わりに刃矢人が返事をしてくれた。

「そうだよ。天音ちゃん、よろしくね！」

刃矢人の声は、いたずらっ子のようなはつきりした大きい声だ。（純とは正反対だ）

そして3人は基地の中へ行つた。これからのこと話をするために・・・

第一話・自分の家なんか・・・！（後書き）

私はこの小説意外にも作品を投稿しているのですが、感想が全然届きません！

読者様、感想ください！お願いします！m(—_)m

第一話・商店街と天音の声

これから秘密基地で暮らしていくために、3人は何か仕事をすることにした。

「内職がいいよな。協力してできるから。」
と、刃矢人。いつもは大人を困らせている悪ガキだが、こういうときは知恵が働く。

「うん、いいね。そうしよう！」

その意見には全員賛成した。（もとから3人しかいないが）

「あ、それから、役にたつかなあと思って、売れそうな物を持って来たよ。」

純はリュックからゲームやフィギュア、きれいに扱っているマンガを取り出した。

「フィギュアは全種類、マンガは全巻そろっているよ。」

種類、巻などがあるものは、すべてそろっていると高く売れるのだ。どれも男の子だけあって戦隊ものばかりだが、天音は興味津々だ。

「お金もたくさん持つて来たけれど、節約したほうが良いよね？」

純は小学1年生だが、時々年に合わない言葉を使う。

「当たり前じゃねえかよ。足りなくなつたら、俺達は生きていけねえじゃん。」

刃矢人も生々しい話をよくする・・・。

でも、これは最低限必要なことだ。3人は半端な気持ちで家を出たわけじやない。

夕方になると雨が降つて來た。基地の上には木の枝が張り出しているが、雨はしのげなかつた。

「うわっ、このままじゃあぬれちまう。純、天音を連れてかさを買に行こうぜ！」

「うん、わかった。天音、行こう。」

3人は近くの商店街に来た。おもちゃ屋から食べ物屋まで、いろいろなお店があつた。

純と天音は商店街には来たことがなかつたから、それぞれのお店をじっくり見たかつたが、刃矢人にやめさせられた。

刃矢人の案内で、洋装店で壊れにくそうなかさを買い、木材屋に行こうとした。

しかし、木材屋の前で警備員に出くわしてしまつた。

「おや？君達、こんな所で何をしているんだい？」

純は、とつさにごまかした。

「いやあ、お父さんにお使いを頼まれたので。」

刃矢人はこつそり、純に『ナイス！』とアイコンタクトをとつた。

それでも、警備員はしつこく問い合わせしてきた。

「君達の住所は？」

さすがの純も、いざとなると賢い刃矢人も、この質問には答えられなかつた。

「純、天音ちゃん、逃げる！！」

刃矢人が走り出した。純も刃矢人の後に続いたが、天音は追いつくことができなかつた。

「天音！」

純は天音に駆け寄ろうとした。しかし、刃矢人が引き止めた。警備員が天音に追いついたのだ。天音は抱き上げられ、かさを落とした。

「だめだ。天音ちゃんはあとで家から連れ出そう。」

天音の泣き声が聞こえた。純は刃矢人の手をふりほどいた。「放して！」

純は必死で頼んだが、刃矢人は聞かなかつた。

「少しの辛抱だ。明日にでも連れ戻せば良い。」

刃矢人は純が天音の所へ行かないように、しつかりと腕をつかんだまま走り出した。

もう純は抵抗するのをやめたが、刃矢人は放してくれなかつた。

何分走ったのだろう。純の頬に涙がつたつた。刃矢人は黙つて走り続ける。

「もう・・・大丈夫だよな・・・。」

急にスピードが落ち、最後は止まつた。刃矢人は息が切れているようだつた。

気が付いたら、森の入り口に着いていた。雨は止んでいる。

「純、行こうぜ。明日にでも連れ戻せるさ。」

刃矢人は明るくふるまつて『いるようだつたが、元気がないのが一目で分かつた。

「ほ、ほら。・・・今日はもう寝ちまおう。明日早く起きればいいや。」

純は無言でしゃくりあげた。自分をコントロールできなかつた。

「純・・・。」

刃矢人は純の背中に手をあてて基地までつれて行き、イスに座らせた。

「寝るんだつたら寝たほうがいいぜ。俺はもう寝るからな。」

そう言つと、かさをテーブルに立てかけて、アウトドアようの寝袋にくるまつた。

純も寝袋にくるまつたが、寝れそうにもなかつた。天音の声が耳について離れなかつたのだ。

「刃矢兄、おやすみ・・・。」

そう言つと、刃矢人も小さい声で

「ああ、おやすみ。」

と返事をした。上を向くと、月の光がわずかに差し込んでいた。腕時計が、7時16分を指していた。

第一話・商店街と天音の声（後書き）

感想ください！お願いします！

第三話・小屋

朝になつた。天気が良いらしく、上を向くと木々の間から日光が差し込んで來た。

「ふあ～。・・・あ、おはよう。」

刃矢人が起きた。

「おはよう、刃矢兄。」

純はたつた今起きたふりをした。昨日は結局寝れなかつたのだ。風がふいて森中から葉のこすれる音が聞こえた。今、始めて秘密基地が自然に囲まれた所だと思つた。

「純、朝ごはんは何がいい？」

刃矢人はすっかり目が覚めたようで、自分の持つて來た缶詰をあさつていた。

「刃矢兄、缶詰よりもスナック菓子やするめを食べたほうが良いよ。」

純は生活に關することは詳しい。

「じゃあ、そうするか。」

2人は消費期限が早いものを片つ端から取り出した。

お菓子セット、ジュース、パン・・・・

2人は消費期限がずっと先の食べ物を選んで持つて來たため、早いものはちょうど節約した2人分くらいだつた。

「栄養バランスは良くないだらうけど、何も食べないよりいいよな。」

テーブルに並べられた食べ物を見て、刃矢人が言った。
たしかに、エネルギー（熱）の元となるものばかりだつた。

仲の良い友達と、話しをしながらの食事は楽しかつた。

「刃矢兄、持つて來たお金で野菜でも買う？」

「そうだな。」

「天音はどうする？」

「きちんと作戦をたてて行こうぜ。」

2人は朝食を終えると、朝から商店街に出た。今度は警備員に見つかる前にお店に入った。

まずは八百屋。野菜を買うためだ。

「純、レタスとかばちやが安いぞ。」

買い物をしたことのない純は、刃矢人に買い物の仕方を教えてもらった。

これからのことも考えて、野菜は多目に買った。

次に、昨日行くことができなかつた木材屋に行くことにした。

「雨をしのぐための小屋をつくろうぜ！」

刃矢人は木を使つた工作が得意だ。図工ではよく賞をもらつてゐる。

2人は大きめの板、金づち、釘、ロープを買った。

しかし、板の大きさと枚数が半端でないので、2人で協力して持つて行くことになった。

「純、今日はうまくいっただな。」

「そ・・・、そうだね・・・。イタツ！」

板を2人でいつぺんにかついでいるので、背の低い純に重さがかかるのだ。

「純、大変そうだな。早いとこ基地に帰ろうぜ。」

「できるならそうしたいよ・・・。」

森の中は進むのに苦労した。板がつかえてばかりで、木を何本も傷つけてしまつた。

でも、そこをぬけて基地につくと、刃矢人があつという間に小屋を作り上げてしまつた。

「うわあ、刃矢兄すごい！」

小屋を点検している刃矢人を見て、純が言つた。

「よくやっていたからな。」

小屋に色は無かつたが、森にある葉を付けてカモフラージュする

と、とてもかっこよくなつた。

純がたくさん葉をつけるから、完成した時には小屋は葉の塊に見えた。

「広く作ったから、今日からここで寝るんだ。」

刃矢人が自慢げに言つた。きちんと床や玄関も作つてある。（げた箱はないが）

2人はさっそく荷物を小屋に運び入れると、寝袋を出した。

「ここからここまでが寝るスペース。残つた所は生活スペースだな。」

「それだけで十分立派だったが、刃矢人は小さいテーブルも作つてくれた。」

「住む場所ができたからって、安心していられないぞ。気を抜くな。」

「うん・・・。」

それから2人は天音をどうやつて連れ戻すか、作戦を立てることにした。

第二話・小屋（後書き）

この小説、目標は1日1話書くこと。これからもがんばって書いていきますので。応援よろしくお願いします。感想もお待ちしております。

作戦は、そう簡単にはできなかつた。

純（天音）の家は、誰かが天音を連れ出すよつまねをできないよう、親が警戒していた。

もし純や刃矢人が玄関から行けば、家に連れ戻されることは間違いない。

だからといって、裏庭から天音を連れ出すことも無理がある

考えるだけで時間はどんどん過ぎていつた。

「なあ、純。本当に天音を連れ戻すのか？」

不意に刃矢人が言つた言葉に、純は何か冷たいものを感じた。

「絶対に連れ戻すよ。」

純の意志は固かつた。刃矢人が何を言おうと、天音を連れ戻す方法を必ず見つけるつもりでいた。

ガサガサガサツ！

森の中に、誰かが入つて來た。

「天音！？」

思わず純は声をあげた。しかし、刃矢人は純の口をふさいだ。

「違う・・・。天音じゃない・・・。」

確かに、天音は基地に來るとき、純が刃矢人の名前を呼びながら入つて來ていた。それに、家出したせいで、当分家からは出してもらえないはずだ。

今のうれしさはどこかへ消え去つた。そして、誰がここへ入ろうとしているかわからない恐怖感が純を襲つた。

森の中にいる誰かは、何か叫んでいる。

「刃矢人ー！刃矢人ー！」

どこかで聞いたことのある声だ。そして、声の主は女人の人だ。

卷之二

て い る

刃矢人は大急ぎで小屋へ飛び込んだ。しかし、相手はそこまで警戒する必要はないはずだ。

ガサガサツ！ガサガサガサツ！

だんだん近づいてくる音と声。小屋の中で縮こまる刃矢人（窓からその様子がはつきりと見える）。

「刃矢人じやなー・・・?」
墓地の端にいたのは女子中学生たった一人

その中学生の髪は長く、目は輝いて見えた。おさげの髪型に、黒い学生かばんが恐ろしいほど似合っていた。

す。
「

ここにいる人は、刃矢人の姉。数日前に家出した刃矢人を探して、

沙由里は純の顔を見て、にっこりと微笑んだ。

「おい！」

小屋から刃矢人が飛び出して來た。

「何だよ、今さら。俺は帰らねーよ！」

そう言つて沙由里につかみかかる刃矢人。2人の身長ははるかに違う。

「あら、誰も帰つて來いとは言つていないわよ。」

落ち着いて対処する沙由里。

「じゃあ、何しに來たんだよ。」

力の弱まつた刃矢人の手を服からはずす沙由里。目には涙がうかんでいた。

「話せば長くなるけど……。純君も聞いてくれる?」

「私と刃矢人は、お義母さんとお義兄さんにいじめられてたの。お父さんがいると何もしないけれど、仕事でいない間は、私達は思つがまま……。」

それが嫌で、刃矢人は家を出て行つたわ。

でもその後、刃矢人がいなくなつて……、攻撃はすべて……私に……來たの。

この前なんか……クスン……金属バットで……殴られたわ……。

しかも……、お父さんが……ヒクツ……出張でいなくて……ウツ……。

だから……私も……クツ……家を出て來たの……。」

それを話しあると、沙由里はわあつと泣き出した。

「姉ちゃん……。」

その時、初めてわかつた。刃矢人はお姉ちゃんつ子だ。

「仕事でも……、家事でも……、何でも……するわ……。お願い……ここに……いさせて。」

よつほど酷い目にあつたのだろう。よつほど辛かつたのだろう。
よく見ると、沙由里の腕には無数のあざがあつた。

「いいよな、純。」

「うん。」

そう言つた刃矢人は、あまりにも元気がなかつた。

「ありがとう・・・。何か・・・すること・・・ない・・・？」

刃矢人は氣をきかして、純の一番望んでいた願いを言つてくれた。

「じゃあ、天音を連れ戻して。」

「わかつたわ・・・。私の立場なら・・・できると・・・思うわ・・・

。」

確かに、家出したばかりの沙由里は、まだ家出したことがわから
ないはずだ・・・。

第五話・天音救出作戦完成

家出したことを知られていない沙由里と、運動が大得意な刃矢人、そして、知識が豊富な純。

3人で力を合わせれば、天音を家から連れ出すことぐらいたやすいではないか。

「沙由姉は、天音を遊びに誘つて。天音が外に出られなくてかわいそうだと言えば、大丈夫だろうから。」

純は親の心理を大体つかんでいる。しかし、ここまで考えが深いのは並の1年生じゃがない……。

「んで、天音をここに連れて来るということだ！」

話を簡潔に終わらせる刃矢人。しかし、これだけだはない。

「そこまで簡単じゃないわ。目的地や帰宅時間を伝えなければ、親が安心できないわ。」

沙由里は1番年上だけあって、大切なところを指摘する。

「簡単だよ。」

純は地図を広げ、基地の位置を指で指した。

「ここに森に基地がある。そこから中途半端に遠い公園で遊び、6時までに帰ると言つんだ。」

本当に、どんな勉強のしかたをすれば、ここまで頭の良い子供になるのだろうか……。

地図には13ヵ所の公園が載つていて。

「じゃあ、やや遠い所にある『ふれあい公園』が良いんじゃない？」

「うん、そうしよう。」「話についていけねええー…………！」

なんとか作戦をたて、いよいよ実行につつす時が来た。ここで、作戦内容を説明しておこう。

沙由里・・・午後2時に天音を迎えて行き、「ふれあい公園で遊んで、6時までに帰る。」と伝える。

純・刃矢人・・・ふれあい公園前の交差点に待機し、沙由里から天音を受け取つて秘密基地へ。

沙由里・・・食事のための買い物をする。終わつたら秘密基地へ。このような作戦でいくことにした。うまくいくかは、それぞれの行動にかかっている。

第五話・天音救出作戦完成（後書き）

くれぐれも、この作戦を純の親にばらさないでください。 続きが変わってしまう場合があります。（笑）

もちろんわかっているとは思いますが、これは架空の話です。上の注意を本気にしてくださいね！（^_^;）

第六話・天音救出作戦実行（前編）（前書き）

『第六話・天音救出作戦実行』は、前編と後編に分かれます。だらだらとした話になってしまったかもしません。

第六話・天音救出作戦実行（前編）

そして、いよいよ天音を連れ戻す時が来た。沙由里は天音の家に行き、純と刃矢人は人目につかないところに隠れた。

ピンポーン

「「ハイ、ドチラサマデスカ?」」
天音の母親が出た。

「沙由里です。天音ちゃんと遊びに行きたいのですが。」

「「スコシオマチクダサイ。」」
思つたよううまくいつた。

（何か・・・何か違う・・・。）

沙由里は胸騒ぎを感じた。

「沙由里お姉ちゃん！」

家から出て来たのは元気な天音と、その母親の姿だった。
「この子をよろしくお願ひします。あんなことがあつたばかりです
から・・・。」

母親の様子からして、本気で天音を遊びに行かせるようだった。
「わかりました。ふれあい公園で遊んで、6時までには帰ります。

天音ちゃん、行こう！」

わざとらしかつたかもしれないが、沙由里はわざと明るく振舞つ
た。
絶えず感じる胸騒ぎをごまかすために・・・。

一方、純と刃矢人は公園の隅にある狭いスペースにじつと座り、
天音を待っていた。

「ヒマで死にそうだよ。」

2分に1度は、刃矢人がこうぼやいた。純は暇なうえ、刃矢人の独

り言（？）を聞かされていた。

正直に言つと、純は基地に帰りたかつた。

座つている所は日なたで暑かつたし、人目を避けるために水は飲みに行けなかつた。

「刃矢兄、もう少しだよ。もう少しすればきっと来るよ。」時間が経つにつれて、刃矢人はぼやかなくなってきた。ぼやく気力が減つてきたのだ。

不意に刃矢人が立ち上がつた。

「どうしたの？ 天音が来たの？」

刃矢人は純の問いかけにも答えず、ふらふらと水のみ場へと向かつて行つた。

「刃矢兄、だめだよ！ 僕だつて我慢しているんだ。」

何とか刃矢人を引き戻して座らせると、純はポケットから小さいペットボトルを取り出した。

「水だよ、念のために持つて來たんだ。飲んで。」

しかし、刃矢人は返事をしなかつた。ペットボトルを取ろうとさえしなかつた。

「刃矢兄？ ほら、飲んでいいよ。・・・・。」

よく考えればわかる状況だつた。刃矢人は膝に頭をもたれ、手は力なく、垂れていた。息は苦しそうで、目は閉じていた。

（きつと脱水症状だ！）

「刃矢兄！ しつかりして！ もうすぐ天音と沙由姉が来るから！」

大きい声を出したつもりだつたが、かれた声しか出なかつた。純は刃矢人の顔を上に向け、水を飲ませた。飲んでいるようだつたが、これだけの水では足りないだらう。

沙由里と天音は何事も無く公園へ向かつて行った。（歩いてふれあい公園まで行くのは少しきついが）

「沙由里お姉ちゃん、お兄ちゃんと刃矢人兄ちゃんいるの？」
当たり前のように、その質問をした。

「いるわよ。2人とも天音ちゃんに会いたがっているわ。」
明るく、明るく・・・そう考えているのだが、何か事件が起こりそうで心配だった。

沙由里は途中にあつた自動販売機でスポーツドリンクを4本買い、天音に1本わたした。

「飲んだほうがいいわよ。脱水症状や日射病になっちゃう。」

一度休憩をとり、水分補給をすることにした。

自動販売機の横においてあるベンチ座つてすぐ、天音が電信柱を指差した。

「あれって、お兄ちゃんと刃矢人兄ちゃんじゃない?」

「え?」

そこには2人の捜索協力願いのビラが貼つてあつた。

『探ししています』

(このままだと2人が見つかっちゃう!)

沙由里と天音は休憩を早く済ませ、大急ぎでふれあい公園へと向かつた。

それから5分ほど後、やつとふれあい公園に到着した。
待ち合わせの場所にいたのは、泣きそうな純と、意識のない刃矢人だつた。

純は沙由里に気がつくと、わあっと泣き出した。

「脱水症状みたい。僕が早くこの水をわたさなかつたからなんだ。」

沙由里は冷静に対応した。

「まず、刃矢人を日影に運びましょう。その前に、純君はこれを飲んでね。純君も危ない状態なんだから。」

そう言うと、さつき買ったスポーツドリンクを純にわたした。

沙由里は刃矢人を抱き上げ(少し重そうだったが)、木の影に連れて行つた。

そして、少しづつスポーツドリンクを飲ませた。

「刃矢兄・・・ごめんね・・・。」

純にできる」とは、ただ謝り続けることだけだった。

第六話・天音救出作戦実行（前編）（後書き）

後編も必ず投稿するので、ぜひ読んでください！

第七話・天音救出作戦実行（後編）

時間は飛ぶように過ぎた。現在の時刻は4時37分。早くしないと、天音の捜索が始まるだろう。それまでに刃矢人の意識を回復させ、基地に戻らなくてはいけない。

「刃矢兄・・・」

純は何度も必死で呼びかけた。

何回名前を呼んだだろうか。刃矢人の意識が戻った。純は刃矢人に飛びついた。

「純、何泣いているんだよ」

あまりにも弱々しい声だった。だけど、彼がここにいるだけで、純は満足していた。

「早く基地に行きましょう。」

沙由里が口を開いた。微笑んでいる。それは、純に安心を与えてくれるものだった。

その後、刃矢人は体力を取り戻し、純と共に天音を基地まで連れてくることができた。沙由里は食材を買いに行き、そこからは何事も順調に進み始めた。

「刃矢兄ちゃん、沙由姉ちゃんはもう帰つて来る？」

こんなほのぼのとした話題に入つた頃だった。

ガザガザッ

侵入者を表す荒い草の音。純は天音を木の陰に隠し、音の主が来るのを待つた。

「沙由姉じや ないね」

「ああ・・・」

緊張感が漂う。せつかく連れ出した天音を手放すわけにはいかなかつた。

「おや？君達はいつかの・・・」

入つて来たのは、天音を家に送つた警察官だつた。

「どうやら君達、家出をしていたみたいだね。家に帰りなさい。私が送つてあげよう」

警察官は手を差し出す。純は一步退いた。その時、刃矢人が叫んだ。

「もう同じ過ちは犯さない！純、天音を連れて逃げろ！」

刃矢人は警察官の飛び掛つて行つた。勢いで大の大人を押し倒し、体重をかけた。

「さつさと逃げる！俺は後で行く！」

純は天音の手を引き、木の間を縫うように走つた。途中で沙由里と合流し、助けてもらつつもりだつた。しかし、彼女はまだ買い物をしてゐるらしく、基地の周りを探しても姿は見られなかつた。

一方沙由里は、まだ胸騒ぎが治まらずにいるため、早く買い物を終わらせて店を出た。基地への道のりが妙に長く感じられる。

（何だろ？ ものすごく良くないことが起こりそうな気がする）思わず足の動きが早くなり、ついには走り出した。基地の前の角を曲がつたところで純にぶつかり、やつと沙由里は止まつた。

「純君に天音ちゃん・・・あれ、刃矢人は？」

純は今まであつたことの一部始終を説明した。そのとたん、沙由里が悲鳴をあげた。

「それじゃあ刃矢人が連れて行かれちゃうわ！」

そして荷物をその場に置いたまま、走つて森に飛び込んだ。純は木の陰で天音に荷物の番をさせ、沙由里を追つた。

刃矢人は持ち前のすばしつこさで警察官から逃げ回つていた。しかし、その腕や脚、頬には無数の傷があり、血が流れついていた。

「さあ来いよ。俺は負けないぜ」

警察官は挑発され、今にも飛び掛つて行きそつだつた。

「だつたら行こうじやないか！」

警察官の攻撃をひらりとかわした刃矢人は、すかさず石を投げつけた。警察官の右目の下に赤い線ができる。

「うつ」

相手がひるんだ隙に、刃矢人は自分のバッグからカッターナイフを取り出した。

「やめて刃矢兄！」

刃矢人はもはや正気ではなかつた。刃矢人は純を後ろへ跳ね飛ばし、警察官を切りつけた。

「刃矢兄！」

それに続けて警察官を蹴つた。警察官はあっけなく転がり、わずかに声を出した。

「お母様が知つたら、何ていうかな？」

わけがわからない純に、刃矢人が説明する。

「純、こいつはこの前の警察官を装つた俺の兄貴の秀一だ」

秀一は純を見、鼻で笑つた。

「兄貴、一度とここに来るな。無理なら一度と来れないようにしてやる」

刃矢人は狂つてしまつた・・・?

秘密基地の一部が血で染まつた。そこに横たわつてゐる男性は、もう生きてはいなかつた。

となりにいる少年は無表情のまま立ちつくした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3935a/>

家出孤児

2010年10月28日08時52分発行